

第20回 全国計量士大会 パネリスト提言・発表概要

◆提言(1) 「大病院の計量管理の現状について」

所属 一般社団法人愛知県計量連合会

計量士部会 会長 松山辰夫 計量士

○キーワード 「大病院の計量管理」「治験薬 GMP 対応」「医療事故防止」
「分析天びんの校正」「家庭用はかりへの対応」

<概要>

大きな病院のはかりの使用数は、100~200台ぐらいありますが、法定計量の対象は、健康診断の体重計と薬局の調剤用のはかりで、おおよそ10台ぐらいです。ですから、大部分のはかりは、自主管理となります。これまで、検査対象を絞っていた病院でも、最近では、治験薬 GMP 対応、ISO 対応、医療事故防止のため、全ての計量器を検査対象にする傾向があります。すると、高精度な分析天びんや、家庭用のはかりなど、定期検査の対象外のはかりが次々と出てきます。実目量が0.01mgの分析天びんは、どのように校正しますか。家庭用のはかりはどのように対応しますか。検査対象外として、みすみすビジネスチャンスを逃していませんか。

◆提言(2) 「『秤改め』からの脱却」

所属 一般社団法人京都府計量協会

副理事長 吉川 勲 計量士

○キーワード 「秤改めの呪縛」「自動車産業界の適正計量管理事業所離れ」「計量管理のガラパゴス化」

<概要>

江戸時代の度量衡制度は、幕府による強い統制によって成り立っていた。その一つが『秤座』による『秤改め』である。『秤座』は明治政府により度量衡法成立とともに解体されたが、『秤改め』は形式を変えながらも令和の時代に脈々と受け継がれている。実は、適正計量管理事業所制度もその延長線上にあるといえる。しかし、そのコンセプトは、ISO9001等の国際規格のコンセプトと大きく異なるものである。裾野の広い自動車産業界で適正計量管理事業所離れが進んでいるのも、両者のコンセプトの違いが起因してのことであろう。

ここでは、『秤改め』とは何だったのか、日本の計量思想に及ぼしてきた影響を述べ、日本の計量管理のガラパゴス化を防ぐために計量士が今後取るべき対応を提言したい。

◆提言 (3) 「代検をする計量士の『年収1000万円(仮)計画』」

所属 一般社団法人福岡県計量協会

理事 末崎 繁 計量士

○キーワード 「代検をする計量士」「年収1000万円(仮)計画」

「活躍する分野を増やす」「収入モデル」「時代に合った計量法の改定」

<概要>

将来の日本の人口推計は2040年には2020年の86%程度になると言われており、労働力人口も大きく落ち込むことが予想される。計量業界においても、産業を支える基幹産業にも関わらず、代検・指定検査機関・適管を支える計量士を確保する為の環境について年々厳しくなっている。生産活動が維持できなくなる時代がくるのか？

現場最前線で働く計量士が正業として選ばれる職業となるべく、社会の検査業務全般を整理し未来志向の自由な発想での提案をしていく。

以上